

LEADERS NOW!



金メダルの その先へ進みたい

次なる目標はデフリンピック

●化学生命工学部 2年次生
喜多 美緒 さん

体育会テニス部に所属する喜多美緒さんは、2019年10月に開催された世界デフテニス選手権大会女子シングルの金メダリストでもある。デフテニスを始めて約2年。喜多さんの挑戦は見事に実を結んだ。

「デフテニスだからといって、特別なルールがあるわけではありません。普段は大学の仲間とともに硬式テニスのトレーニングを続けています」。子どものころからテニスに夢中になり、高校時代は全国大会を目指して猛練習を続けていた喜多さん。しかし、幼少期からの聴覚障がい進行し、大学を受験するころには、これから先テニスが続けられなくなるのではと心配になっていた。そんな時に出会ったのがデフテニスだった。関西大学に入学後、本格的にデフテニスの道へ。高い実力が認められ、すぐさま日本代表へのオファーを得た。

普段は補聴器をつけて生活をしている喜多さんだが、デフテニスは音が聞こえない状態でプレーするため、試合中は補聴器を外さなければならない。始めたばかりのころは戸惑うこともあったが「視覚に集中して判断することで、自分のテニスができるようになってきました」と喜多さんは話す。

プレーヤーとしての毎日を支えているのは、テニス部でのトレーニング。「関大のテニス部はレベルが高い。だから、仲間との練習がそのままデフテニスでも通用する。素晴らしい練習環境だと思います」。

一時は、テニス部への入部をためらったこともあった。学業と両立できるかが心配だったし、何より耳が不自由なことで他の部員に迷惑をかけるのではないかと気掛かりだった。しかし学業も部活動も、先輩や仲間たちがしっかりと支えてくれた。「講義が聞き取りづらかった時は、ノートを貸してくれる友人がいますし、部内でも、部員みんながさまざまな心配りをしてくれる。だから本気で頑張ろうと、覚悟を固めることができました」と振り返る。

2018年、トルコで開催された世界デフテニス選手権の団体戦に初出場。決勝まで進むも、ドイツ選手の前に敗れ去った。その



(写真・右)世界デフテニス選手権大会・女子シングルで優勝し、金メダルを獲得した喜多さん
(写真・左)女子ダブルスでも準優勝し、パートナーの河津美佐選手と共に銀メダルを獲得



喜多 美緒—きた みゆ
■1998年、東京都生まれ。雲雀丘学園高等学校卒業。本学体育会テニス部所属、デフテニス日本代表。テニススクールに通う両親の影響で10歳のころからテニスを始め、大学入学後は体育会で練習を重ねる。

悔しさをバネに2019年、同じトルコの地で、世界選手権の個人戦に出場。決勝まで勝ち上がり、迎えた決勝の相手はくしくも前年に戦ったドイツ選手だった。1年間の猛練習が実り、見事勝利。対戦相手から「良いプレーだったね」と国際手話でメッセージをもらい、喜多さんは1年間の成長を心から誇らしく感じた。

世界選手権での成績が評価され、2019年日本パラスポーツ賞優秀賞に選ばれた。「長年、世界で活躍してきたような選手に贈られる賞だと思っていたので、私にもらっていいのかと感じましたが、デフテニスの普及のために私から発信することができればうれしいです」と目を輝かせる。

練習のない時には、デフキッズテニスの指導にあたる。対象は、近畿圏で活動する聴覚障がいを持った幼稚園児や小学生たち。「私が試合でいい結果を出すと、みんなとても喜んでくれます。多くの人に支えられて、大好きなテニスが続けられることが本当に幸せです」。

次なる目標は、2021年に開催される聴覚障がい者の五輪、デフリンピックで金メダルを取ること。「バレーボールやサッカーなど、他の競技で活躍するデフスポーツ選手と交流できると思うと今から楽しみです」。海外のプレーヤーともっと親交を深めるため、国際手話も身に付けたいと語る喜多さん。思いはすでに、来年のデフリンピックへと向かっている。



教養を深め、 展覧会を作り上げる

日本美術を担っていくべき学芸員を目指して
●京都国立近代美術館 研究員
平井 啓修さん
大学院文学研究科博士課程後期課程
2012年単位修得後退学

夢だった学芸員になり、「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」、「明治150年展 明治の日本画と工芸」等、次々に展覧会を担当する平井啓修さん。「お金やモノはなくなっていき、教養はなくなる」。大学時代の恩師の言葉を胸に、着実に専門性を深め、歩みを進める。

平井 啓修—ひらい よしのぶ
■1983年、大阪市生まれ。2007年関西大学文学部卒。09年文学研究科総合人文専攻芸術学美術史専攻修了、12年同専攻専攻単位修得後退学。愛知県美術館の学芸員を経て、13年より現職。専門は日本近代美術史。所蔵作品の保管、展示、資料収集、調査研究から展覧会の企画、運営、広報活動に至るまで幅広く携わる。



円山・四条派の全貌を捉えた
永久保存版!

2019年8月から東京藝術大学大学美術館、11月から京都国立近代美術館にて、江戸時代の京都で活躍した絵師・円山応挙をはじめとする、近世から近代へと引き継がれた画家たちの系譜をたどる過去最大規模の展覧会「円山応挙から近代京都画壇へ」が開催された。平井さんはその企画から運営までを統括。応挙の代表作で国指定重要文化財でもある襖絵群の再現展

示をはじめ、テーマごとに画家たちの表現の特徴を追うなど、さまざまな試みを盛り込んで盛況を博した。「展覧会の担当は毎回緊張します。しかも今回は自分の専門である近世美術。これまでの積み重ねが問われ、より一層背筋を伸ばしてやらなくてはと、緊張しながらもうれしくもありました」。

家族に連れられ、幼いころからさまざまな展覧会へ足を運んできた平井さん。写実的な彫刻や絵画に魅了され、中学2年生の時、それらのそばにいられる仕事を調べて学芸員を知った。大学では美術史を専攻したが、学芸員は狭き門。即戦力が求められるため、修士以上が必要。両親に経済的な負担をかけるわけにもいかず、大学院進学は考えず、学芸員になることもあきらめていた。しかし、「君、大学院に進まないの?」。ある教員のひと言に心が動き、そこからは大学院の授業料と生活費を稼ぐため、アルバイト三昧。「食べることに展覧会に行くことを天秤にかける日々。後悔しなくて食事を抜いて、みるみる痩せました(笑)」。

とことんやり抜く性格は、今も変わらない。円山・四条派展で展示したい作品を記した「ドリームリスト」は、約300点にもものぼった。「近代までの流れを紹介すると、代表画家だけでも軽く50人を超え、どう絞っても124点。全部展示したかったので、前期と後期で総入れ替えしました」。欲張りだからと笑って語るが、所蔵者との交渉だけでも相当な労力だ。「大変ですが、お話を伺い、いろいろ教えてもらえる貴重な機会。自分の中に一つ一つ蓄積され、教養として残ります」。当然、こなすべきことは他にも膨大にあった。会

場の設えや展示の構想、図録やフライヤーの制作、イベントの準備……。にもかかわらず、平井さんは展示や図録の解説も全部一人で書こうとしていたという。「一人でやろうとしていたら、周りの方々が声を掛けてくれて分担してくださいました。以前にも、同じようなことがあったので、お願いすることにも少し慣れたかな(笑)」。

手応えを尋ねると、研究者には並べて観てみたい画というものがあるのだそうだ。「例えば、応挙の絶筆『保津川図』とその構図を模した竹内栖鳳の画。学生のころから並べて観てみたいと思っていた画の対比をいくつも実現できました。おおむね好評だったようで、名品がたくさん観られて良かったとうれしいお言葉をいただきました」と安堵の表情。自らギャラリートークを務めたイベントも好評で、今後もなるべく続けていきたいとのこと。「説明を付け加えることで理解を深めていただけるし、会場の反応が励みにもなります」。

目下、平井さんが意識するのは時間の使い方。多様な業務を効率的に進めるため、付箋を持ち歩き、タスク管理を習慣化した。また、定時に仕事を切り上げ、研究時間の確保に努める。「早起きして時間の有効活用を心掛けています」。今後の展望は、関西大学KU-ORCASと大坂画壇に関する企画を模索中とのこと。一方で、国際化にも目を向けること。「日本美術は海外にも多く保管されています。海外の美術館で学芸員として活躍する日本人もいっしょに、そうした方々と一緒に、日本美術を担っていく人間になりたいです」。



平井さんが担当した展覧会の図録

